



Title	＜書評＞「乳がんのうた」（市井ノリ子著，保健同人社，1,600円）
Author(s)	9月にはママ
Citation	大阪公衆衛生. 1991, 59, p. 19-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83635
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『乳がんのうた』

市井ノリ子著（保健同人社 1,600円）

そんなはずはないといく度も確かめる
乳房に触るるかたきしこりよ

人は誰も健康であればあるほど、まさか自分ががんに罹るとは考えないだろうし考えたくないものだと思う。この本は題名のごとく、乳がんにかかった保健婦の体験記である。文章のおりおり短歌が詠みこまれ、乳がんにかかってしまった悲しみや悔しさなど、著者の心のうごきを素直に表現している。

また著者は、あくまでもプロフェッショナルを追求したきびしい保健婦としての仕事への熱意を綴るとともに、その反面、息子をおもいやるやさしい母として、夫に感謝する妻としてのおもいが熱く綴られている。

過ぎし日に吾子育てたる胸なれば
癌禍は根こそぎ乳房奪いぬ

また、再発後の発見が遅れやすいと言われる乳房再建術について、するべきか否か迷う女性の心の動きもきめ細かく描写している。

おのが命縮める結果にならぬかと
夫は気遣ふ乳房再建

こうして、著者は乳がんを体験した女性として、今後の保健婦活動に生かしていきたいと熱いメッセージでしめくくっている。

衝撃のまだまだ燻り詠みつづく
四季をりをりの「乳がんのうた」
（9月にはママ）